

興福寺北円堂の表象世界 — 弥勒像の像容に関する考察 —

行方敬太郎（早稲田大学）

興福寺旧南円堂四天王像（現在中金堂所在。以下、旧南円堂像とする）は法量や用材の問題から近年、運慶一門が建暦2年（1212）に造立した北円堂再興像であると支持されている。旧南円堂像の形制と持物について検討すると、これが8世紀前半の図像的特徴を具えているといえ、さらに養老5年（721）の北円堂当初四天王像の図像形式を踏襲している可能性が考えられる。また筆と卷子や足元に邪鬼を伴う四天王像に関してはこれを現世ではたらく四天王の姿とみる指摘があるが、その両方を伴わない旧南円堂像は現世でない場にいる四天王と解釈される。しかし北円堂は如来形の弥勒像を中尊とすることから兜率天ではなく弥勒が下生した現世を表象するものとされており、旧南円堂像との間には矛盾が生じることとなる。

そこで注目されるのが北円堂と同年同日に造立された中金堂弥勒浄土変である。『興福寺流記』は「宝字記」を引用して弥勒浄土変の中尊を「弥勒仏像」と記し、また京都国立博物館所蔵興福寺曼荼羅図（13世紀初頭）では中金堂弥勒浄土変中の弥勒が如来形で描かれる。さらに中国に目を向ければ、敦煌莫高窟第33窟南壁の弥勒経変（盛唐）でも兜率天上の弥勒が如来形であらわされている。このように兜率天上の弥勒を如来形であらわす作例が見出される以上、北円堂弥勒像についても再考する必要がある。

北円堂は元明・元正天皇、中金堂弥勒浄土変は橘美千代・光明子と発願者が異なるものの、どちらも藤原不比等の一周忌にその追善で造立された点は共通している。奈良時代の弥勒信仰については兜率天への往生を願う上生信仰が圧倒的であり、未来世において弥勒の龍華三会への値遇を願う下生信仰はこの時期にはまだみられないとされる。『流記』の記述からは明確に不比等の往生先として願われた場所が兜率天であるとはいきれないものの、同時期の信仰を参照すればやはりそれが兜率天であった蓋然性が高い。不比等の兜率天往生を願い造立された二つの如来形弥勒像の一方が兜率天上の弥勒像であれば、もう一方についても兜率天上の弥勒像と考えるのが穏当であろう。

先に挙げた莫高窟第33窟南壁では兜率天の下部に四天王像が描かれており、これは須弥山中腹の四天王天をあらわしているとされる。弥勒、脇侍菩薩二軀、羅漢二軀、四天王という北円堂の尊像構成についても兜率天上の世界とそれを守護する四天王と考えることによって、ここに現世でない場の四天王の像が造立された意味を理解することが可能となる。その上で旧南円堂像の問題に立ち返り、これが図像としても北円堂四天王像と認められると主張したい。